

また、何か訊ねてみたいと思っている矢先に

井口先生がお亡くなりになる2-3週間前、理研で面白いデータを出した人がいて、質問のメールを出した。2次電子関連のことだと、先生にお尋ねするしかない：私個人は放射線化学の本質はDegradation Spectrumだと思っているが、そういうときに頼りになる議論の相手は先生しかいなかった。数年前胃癌の手術をされていたことは知っていたので、少し嫌な予感がして、永石さんに、最近のやり取りの確認もした。そして、いつもはすぐ何らかのお返事があるのだが、そのまま遠くに逝かれてしまった。

井口先生というと、学会の最前列に座って、講演者を見ず(!)に、聴衆を見ながらの、あの不敵な微笑みを思い浮かべる。親しくなると、これは学問に対しての不敵な微笑みで、私たち若輩者や研究者仲間に対しては優しさとちょっとしたユーモアに満ちた微笑みであることが何となく理解出来るようになる。

若き日の先生がまだ大学院生の時に、高分子の放射線重合の話を目にして、これは面白いものだと思われたことがこの分野を選ばれたきっかけで、それ以来「放射線照射のサイエンス」をライフワークにされたそうである。例えば原子分子関係の聴衆を前にしても、自分は放射線化学(物理とはおっしゃらなかったと記憶する)者だと言い切っておられたことが小気味よかった。物理過程とか化学過程とかを分け隔てしないで、「放射線化学は、こんなにも面白いテーマだ」といつも思っておられたのだと思う。特に若いときに意気込んで組み込まれて、そのままずっと興味をお持ちで居られたのは、2次電子がどう物質に影響を与えていくかという、一番複雑でややこしい部分だったのだろう。

とにかくお若いときから膨大な業績を重ねられ、私たちにとってはそれらを参考にさせていただくのが精一杯で、先生のレベルにはとうてい追いつけるものではない。怠け者の私たちは、ろくに先生の業績もフォローせず、明らかにすべき大事なものは、すっかり先生に刈り取られてしまったような印象さえ持つてしまう。しかし、ひとつひとつの問題を解明されてきた先生ご自身が、「まだいろいろわからないことがある。まだいろいろ面白いことがある。あなた達は、私ほどそれに気づいていないし、面白いとも思っていないのではないの？」というような感覚で私たち後輩をご覧になっていたような

感じがする。それが、あの微笑みだったのかも知れない。そして、「放談」のあの語り口だったのかも知れない。

井口先生には、最初は近寄りたく、このため、ほとんどお話をしなかったのだが、最晩年に話をさせていただくようになった。毎年夏に理研にはよくお見えになられていたこともあり、放射線化学の編集主査をやったころの「放談」でのやり取りから始まって「放射線化学のすすめ」を出したころから、少しだけ交流が出来るようになった。先生の共同研究者の方から「送るように言われた」と別刷りが送られて来たこともあった。「よく読みなさい」と言うことだったと思うが、未消化でちゃんと応えられなかったことを悔やんでいる。

「放射線化学のすすめ」の話に戻れば、実は河内先生と一緒に書いた9-1節は、放射線化学をわずか10ページで書き表すという課題を自らに課して取り組んだものだった。しかし、ある教科書を参考にしたことで混乱してしまい、また、SI単位系で書かれた成書が外国を含めて全く見あたらなかったのも、物理学的に相当に危ない内容になりかかったことがあった。その中で、井口先生がずいぶん前に書かれた日本語の総説が実にクールにまとめてあって、クオリティを高めるために本当に参考になった。日本語のせいもあって、腑に落ちる、という言葉がはつきりとわかるくらいの感覚を覚えたものだ。

放射線化学会で、ヒアルロン酸水溶液の異常拡散の話をもつ益田さんが早稲田で発表したときに真っ先に、しかも、その場で評価して下さったことを思い出す。とにかく「何が面白いのか」という、我々日本の研究者が論文の増産や体裁にこだわるが余り、ないがしろにしがちなことを、実に軽やかにこだわっていらっしやうに思う。そして、我々に対する評価は時には(口には出されなかったが)厳しいものであったと思う。

結局、放射線化学の本質は、偉大なる先生の一生をもってしても全て解明されたわけではなかったのである。今一度、未完に終わった「放談」を読み直さなければならないだろうし、「君たち、これでわかるかなあ?」と、天国から、私たち後輩に向かって、あの微笑みでにっこりされているかもしれない。

そう思って街をさまよっていたら書店で1月に出された「英語の書き方」の再編刊を見つけた。奥付にコメントを著した先生の写真(お別れ会の遺影にも使われてい

た)があつて街角か大学のキャンパスで偶然すれ違った
ような感覚を覚えた。またお会いできたらいろいろ訊ね
てみたいことがあるのだが、それももう叶わない。

合掌

(独立行政法人理化学研究所 丑田公規)

Remembrances of Mitio Inokuti.

The first time I met Mitio Inokuti, he invited me to a contractor's meeting for the Radiation Physics section of the Department of Energy (DOE) (or its predecessor organization at that time). He had read our work on the decay of the electron and hydroxyl radical at early times and recognized that these data were important tests for the modeling that was being done by the particular program of DOE. It was an important introduction for me to this field of Radiation Physics. I had not recognized the relevance of our work to this field, probably primarily because I was unfamiliar with the field. I was grateful for Mitio's insight that recognized how the work from outside his field could be relevant to the broader scientific community.

While Mitio and I spent more than thirty years at Argonne, strangely enough, we probably spent most of our time talking at meetings. He created a discussion group at Argonne that dealt with various topics in radiation, tying the Biology, Chemistry and Physics together. This group met for several years but with changes in funding and the flux in the mission of the Department of Energy, it eventually expired.

What was always impressive about Mitio Inokuti was his ability to recognize important problems and to tackle them. He recognized the important questions of how energy deposition occurs in non-polar media and proposed to create a quantum solution for this problem. To tackle such problems requires a knowledge and imagination that is necessary in today's science – to tackle the difficult problems without the fear that the effort may not succeed. Too much of the research today is limited by the fear of failing. This is what we will miss about Mitio Inokuti, his bold efforts to solve the hard problems.

(Argonne National Laboratory, Charles D. Jonah)